災害続発に職場の怒り

会社 生産あっての保安

むき出しの生産第一主義

合理化の嵐のはげしさは、これまでを上回る攻撃となつて三池全山を包んでいる。もはや、三池労組員や新労組員の区別はない。とにかく団結だ、手をにぎろう！（絹田カメラマン撮す）

昭和三十八年の三川鉱炭じん爆発、同四十二年九月二十八日再度同鉱で発生した坑内火災は、三池炭鉱における保安対策の劣悪さを象徴的に物語る大災害だったにもかかわらず、会社側は何の反省もすることなしに、これまでにもまして坑内保安をおびやかさずにはいない、きびしい内容の第四次合理化案を提案してきた。一月のことであるが、その提案の前から早くも、「生産あってこそ保安もあるのだ」と、いまやむき出しに生産第一主義をふりかざしながら、ありとあらゆる攻撃をかけてきている。果てしなき災害の続発がそのことを証拠だてており、三池労組員と新労組員の別なく、怒りが全職場を覆って燃えている。

まさに追い打ち

許されぬ第四次合理化

四山では坑内火災（三月二十九日）、三川では炭車暴走（四月九日）のため坂本俊雄さん（五十二才、三池労組員）が瀕死の重傷、そのほかとんでもないところから雷管の装填されたダイナマイトが出てきたり、いま坑内は三十八年のあの大爆発直前を思わせる恐ろしい実態におかれている。

出炭は急上昇

ところがそんなことなどおかまいなしに、出炭量はうなぎのぼりに上昇している。

あの三池闘争の直前に八千トンほどに過ぎなかった一日当りの出炭量は、闘争終了後一万五千トンとなり、やがて二万トンとなり、いま会社が目標としているのは二万五千トン。現に一月二十三日にはおどろくなかれ、その目標の二万五千トンを達成したというのである。

会社側は「お祝い」のタオル一本ずつを全従業員に配り、生産意欲をあおったものだ。

能率も倍近く

これが疑いもなく、はげしい労働強化によって達成されたことは鉱員一人当りの出炭能率の推移が示している。それが昭和三十七年に三四・二トンだったのが、四十年に五一・四トン、四十二年に六二・四トン、今年はなんと七四・三トン（二月の実績）というものすごさである。

この能率は太平洋（五二・九トン）、住友（四八・二トン）、雄別（四七・二トン）、北炭（四五・九トン）、常盤（三七・四トン）、三菱（三四・六トン）＝以上の数字は〝くろだいや新聞〟の【昭和四十二年十二月場所番付表】の記事による＝を、すべて上まわる実績である。

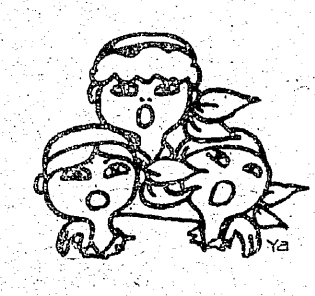
災害率も倍増へ

以上の生産における上昇ぶりに対して、災害の方はどうか。

稼動労働者一千人当りの災害率を見ると、昭和三十七年の〇・四六二に対して、四十二年は一・〇九と上昇している。

なおこまかく見ると、三十七年の在籍者が一万五千三百二十八人で、死傷数二千二十八人（うち死者十一人）なのに、四十二年は在籍八千五百九十五人で、死傷者数が二千九百六十七人（うち死者十五人）だ。

その上第四次合理化の攻撃をかけてきているところを見れば、三井鉱山はこの上人をしぼり、労働条件をひきさげ、差別支配を強め、いっそうはげしい労働強化を押しつけようというのである。まさに追いうちで、このような第四次合理化を許すことができようか。



金属にも相つぐ災害

「安全」を口ではいうが…

岐阜県神岡鉱山の栃洞鉱転場で二月十六日夜、一人の労働者が鉱石をくだく機械にはさまれて死にました。組合の調査だと、会社が雪害のおくれをとりもどそうと、保安通路まではがして鉱石を入れたこと、鉱舎の降鉱能力をふやすため、コンベアを約七十センチ高くあげ、機械と天井のハリの間をわずか八センチしかあけておかなかったことなどが直接原因です。

この転場、ことしの一月百万時間無災害記録を達成、保安第一のモデルに指定され、会社がこの転場につづけと、鉱山全体に号令をかけていた矢先のことでした。

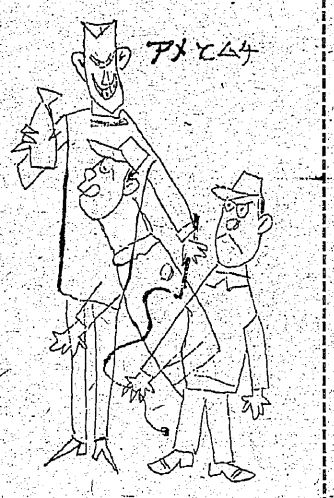
ところがこの表彰のとき、八件もあった災害が「不休傷」ということでかくされ、「ここで事故が起こったらたいへんだ」と転場の仲間に指摘されていたことも明らかになりました。「百万時間無災害運動がどんなにでたらめなものかよくわかった」――組合員の怒りは大きく広がっています。

〝自分の身は自分で守れ〟

〈金属鉱山では最近こうした死亡災害が急激に増え、いまさらのように生産第一になった「合理化」のむごさが暴露されていますが、資本家は災害問題をどう考えているのでしょか。その一端が住友金属鉱山の社内報「いぶき」（三月号）に出ています。同社内報は「足尾銅山に〝安全第一〟がとり入れられ、安全活動が組織されて約六十年になる」とのべたあと、つぎのように書いています。

「この過程を省み、今のわれわれの行動を反省すると、余りにもこれらのシステムとか運動とかにたよりすぎ、われわれの祖先が持っていたと思う〝自分で自分の身を守る〟ため、つまり〝自分の仕事に打ち込み、その中に安全をとのようにとり入れるか〟を自分で工夫創造する気風が不足がちになったのではないのかと思われます。ことしは明治百年にあたりますし、温故知新（引用者注＝ふるいことを研究してそのなかから新しいことを知る）の意味で先人のつちかってきた転人気質を学び直す必要があるのではないでしょか」みずからの保安サボを棚上げして、明治の転人気質をよびかけるなど、ぬすっとたけだけしいにもほどがあります。――後略【KNA】

▼どうでしょうか、どこの資本家の考え方もまったく変らないことが、ハッキリ出ているではありませんか。とうか三井鉱山の経営者の態度と、参考までに見くらべていただきたいものです。



このマンガは、四山支部の〝保安闘争情報〟第十一号から紹介しました。

日本の黒い現状に鋭いメス

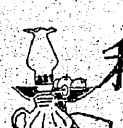
共同通信社会部編『この日本列島』

☆本書は「七十年を前に、日本の中の〝星〟（米軍・自衛隊）について正確な認識の材料を提供するとともに、激化するベトナム戦争と日本とのかかわりあいの実情を全国各地、各界にさぐって、日本、アジア、世界の平和のためにいま、われわれはどう考え、どう行動すべきかの参考に資したい」とあとがきで結んでいるが、結論は日米「安保条約」のもとでの日本の黒い現状を、わかりやすい文章で教えてくれている。

☆内容は、「在日米軍」「自衛隊」「ベトナム戦争」の三部から成り、十数人の記者が足で取材しているだけに、レポートは迫力をもち、手際よくまとめている。

☆「在日米軍」の項目では、まず安保条約に基づいて日本に駐留する在日米軍は空、陸海の各軍と海兵隊の四軍将兵二千九百人。家族を合わせて八万六千人。基地は百四十六カ所である。また自衛隊幹部の米国での訓練、教育もやっており、教育を受けた自衛隊員は二千八百四十三人。高校生クラスは本格的な軍事教練もあると、書いている。

ついで立川空港は完全な兵員の輸送基地でギナ臭いがただよっている動きの激しい日々をルポ。そして、米国陸軍死体処理場の内部まで取材し、鋭いメスを加えている。

☆また「ベトナム戦争と日本」では、日本表玄関、羽田空港が軍事基地に包まれてしまっていること。ベトナム特需の〝総本山〟在日米軍調達本部が横浜市中区にあり、これを三菱、三井、住友など〝死の商人〟が血まなこでとりまいていること、続々生まれる米軍野戦病院など「安保条約」のきずなで、日本列島が結びつけられた恐ろしさをナマナマしく指摘している。七十年安保を前に、一人ひとりが一読すべき本である。（現代書房刊・四百五十円）

私の書棚